

大松博文に関する論説の一考察

スポーツ科学課程 00 - 218 中谷朋美

I. 研究の動機および目的

大松博文は「なせばなる」ということばを信念に掲げ、1962年にモスクワで行われた第5回世界選手権大会、1964年の東京オリンピックで女子バレーボールチームを優勝に導いた監督である。その練習は、選手が骨折をしても練習を休ませなかったり、また夕方4時から夜の11時まで練習を続けたりというふうに現在ではとても考えられないような壮絶なものであった。

このように壮絶な練習を行うことで定評があった大松は、彼自身がバレーボールの監督として活躍していた1960年代、1970年代の社会でどのように捉えられていたのだろうか。本研究では、当時の雑誌記事、新聞記事の彼に関する論説においてどのような記述がみられ、どのような特徴が見られるかを示し、その論説がどのような背景から生み出されたのかについて考察していく。

本研究の目的は以下になる。

- ① 大松博文に関してどのような論説があったのかを明らかにすること
- ② 大松博文に関する論説とその時代背景のかかわりについて考察すること

II. バレーボール指導者としての大松博文像

i. 大松博文の経歴

大松博文は大正10年(1921年)に香川県に生まれ、坂出商業の3年生のときにバレー部に入部し本格的にバレーボールを始めた。そして昭和13年(1938年)に関西学院高等商業学校(のちに関西学院短期大学商科(1958年廃止)以下関学)に入学した。大学時代は関学のバレー部で選手をしながら、当時大日本紡績尼崎工場(以下日紡尼崎)の女子バレーボールチームの監督であった清水節二氏のすすめで日紡尼崎のコーチもしていた。清水氏は大松を関学に入学させ、日紡尼崎の女子バレーチームのコーチをさせるなど、いわば大松を指導者の道に導いた人だといえる。この意味で清水氏との出会いは大松にとって大きな意味をなすものだといえる。

昭和16年(1941年)に関学を卒業し、大日本紡績(以下日紡)に入社した。その年の12月から出征し、昭和22年(1947年)に復員。昭和29年(1954年)に日紡のバレーボール活動が貝塚工場に統合され、大松はその初代の監督に就任した。そして数々の業績を残し、昭和40年(1965年)1月にニチボーバレーチーム(昭和39年4月に大日本紡績株式会社はニチボーに社名を変更)の監督を辞任した。その後、ニチボーを退社し、昭和40年9月

には電通に入社、昭和 43 年(1968 年)には参議院議員選挙に当選し、一期務めた。そして、昭和 53 年(1978 年)11 月 24 日、バレーボールの指導に訪れていた岡山県で心筋梗塞により 57 歳で生涯の幕を閉じた。

ii. 大松博文の信念

大松の著書である『おれについてこい!』(1962,講談社)の本文中の選手に言い聞かせているという意味のある文、(大松が)信じているという意味のある文から大松の信念を導き出した。大松の信念は以下のようにまとめられる。

- ・ やればできる
- ・ 自分を制しなければならない
- ・ やるからには徹底してやらなければならない
- ・ 勝つことが大事だ
- ・ 苦しむことで幸福が得られる

このような信念は『おれについてこい!』の中の「わたしがもつ、信じたことに邁進して動じない図太さ、いかなる肉体的困難も、精神力によって克服できるという信念、それはこの戦争体験なくしては考えられません。」という文からもわかるように、戦争体験が大松にとって大きな転機となり、バレーボール指導者になってからの考え方にも大きな影響を与えたと考えられる。また、勝つことによって名誉と栄光が与えられることによりそれまでの苦しみが報われるということと、勝ってはじめて自分が今までやってきたハード=トレーニングが意味を成すということを感じてやってきたために、勝たなければならない、勝つことが第一だという考えが生まれたと考えられる。

III. 大松博文に関する論説の特徴と考察

i. 大松博文に関する論説に見られる特徴

大松に関する論説はそのほとんどが大松の根性論について触れていた。その中で、大松の根性論については「少なくとも我執にとりつかれた『意地』の張り合いとは縁を切った、積極性と創造性」(周郷,1965)があり、また選手一人一人を暖かく見守り、「ハード=トレーニングの傍らにはいつも医者が控えている」(朝日新聞,1965 年 2 月 4 日)というように新しいものがプラスされていると述べられている。

また、「大松氏がすぐれていたのは、この徹底した『勝利こそすべて』のために、徹底した備え…(中略)…とそれを可能にした人間関係をつくりだしたことにある」(森川,1974)というように大松の築いた選手との人間関係が注目されている。

さらに、「この生き方は、『成り行き任せ』でだらけたことの多いいまの日本に、意味ふかく語りかける」(朝日新聞,1964 年 9 月 2 日)「何よりも心を打つのは…(中略)…彼の

暖かさだろう。そこにわれわれは、人間味が人間の無限の可能性を引き出した一例をみる」(朝日新聞,1965年2月4日)のように大松の人間性に注目されていることも特徴的である。

また一方で、大松の根性論には形式的鍛錬主義に陥る不安を感じる(春田,1965)、「大松監督が持った一種の人生論というか哲学みたいなものに魅力を感じたので、そういうことをはずしてしまって末梢的な訓練だけを持ってきても無意味だし有害だろう」(周郷,1965)のように大松の根性論への不安、練習法の危険性について指摘されている。

そして、「日紡貝塚チームの活動への感動という形で表現された国民の『根性』と『ナショナリズム』への待望を、権力による国民支配の足がかりとして利用する傾向があることを、われわれは厳戒し、排除していかなければならない。」(春田,1965)というように、大松の根性論がスポーツの世界にとどまらずそれ以外の場で権力に利用されているということが指摘されているように大松に関する論説においてはよいことばかりが言われているというわけではなかった。

ii. 考察

大松に関する論説において、そのほとんどが大松の根性論について触れられていた。では、このような論説はどのような背景の下で生み出されたのだろうか。高度経済成長下における日本の教育は経済政策に従属し、「能力主義」に基づいた競争と選抜による人材育成システムと化していた。また、高度経済成長下の日本企業社会においては、企業労働者は地位の上昇、生活の保障のために労働者間の競争に勝ち抜いていかななくてはならなかった。また、企業は企業間競争に勝ち抜かなくてはならなかった。このように1960年代の日本社会にはあらゆるところに競争が存在していた。そのような中で大松の「勝つことが第一」「なせばなる」という考えはさまざまな競争に立ち向かうための教訓になりえたと考えることができる。

そして、高度経済成長という大きな転機をむかえ、世界に地位を築いていこうとしている当時の日本にとって、世界大会での優勝はスポーツ界だけの快挙とはなりえなかったはずである。そのため、大松の根性論がスポーツ以外の場で利用される傾向があったと考えられる。また、このころ国家主義、軍国主義から愛国心が求められ、教育においても愛国心教育が取り入れられていた。そのような中で東京オリンピック、その全国民の注目の舞台での優勝ということはこの愛国心形成ということに利用されざるをえなかったと考えられる。この高度経済成長期の日本において、企業や学校などさまざまなところで競争の原理が取り入れられ、労働者や生徒たちを競争に駆り立てるために、世界での優勝という事実をもって示された大松の根性論は利用しやすかったと考えることができる。

大松に関する論説においてその根性論を安易に取り入れることについて危険性が示されていた。それは1965年5月の東京農業大学ワンダーフォーゲル部死のしごき事件や、1970年6月の拓殖大学のしごき事件などにみられるように行き過ぎたしごきが問題になりはじめたためではないかと考えられる。「しごき」というキーワードで朝日新聞の見出し検索(CD-ASAX)を行なったところ1960年～1969年では10件、1970年～1979年では49件であった。1970年代は1960年代と比べると5倍近く「しごき」について新聞で取り上げられている。すでに行き過ぎたしごきが問題となり始めていたためにこのように危険性が示されたのではないだろうか。また、大松と選手との関係がすぐれていたということや、大松の人間的な暖かさが示されたのは、大松の行なった練習法がただの非人道的なきびしい練習だったのではなく、人間性を備えたものだったということを示し、これも非人道的なしごきに対する危険性を示したものだと考えられる。

IV. 結論

①大松に関する論説のほとんどは彼の根性論に触れていた。そこでは彼のいう根性は従来の根性のイメージである意地の張り合いのようなものではなく、創造性や選手を暖かく見守ることというような新しいものが加わっているといわれていた。そして彼が築いた選手との人間関係や、人生観、人間性が注目され、肯定的に捉えられていた。一方で、大松の根性論や練習法に対する不安や危険性、大松の根性論がスポーツ界にとどまらずそれ以外の場で権力に利用されているということが示されており肯定的な論調のものばかりではなかった。

②大松に関する論説が書かれた背景には高度経済成長時代があった。高度成長時代のさまざまな競争に人々を駆り立てる権力にとっても、競争に立ち向かう側にとっても大松の根性論は教訓となりえたと考えられる。またオリンピックという全国民の注目の舞台での優勝は、権力によるナショナリズムの形成に利用されやすかったと考えられる。

V. 今後の課題

本研究では筆者が見つけることができた11の大松に関する論説を見るにとどまったが、さらに多くの論説を見ることにより、大松に関する論説についてより多くの知見が得られると考えられる。また、論説と時代背景とのかかわりをみていくときに、時代背景についてより深く理解する必要があるといえる。

<主要参考文献>

大松博文(1962)『おれについてこい!』,講談社